

◎特集2:アール・デコの館 庭園美術館建物公開

—朝香宮のグランドツアー—

2010年12月11日(土)—2011年1月16日(日)

Art Deco in the Former Prince Asaka Residence

かつてイギリスの富裕な貴族層の子女たちは、見聞を広め様々な経験を得るため、数ヶ月から数年に及ぶ大旅行“グランドツアー”に赴きました。彼らは御用掛や家庭教師を同伴しての大きかりな海外旅行を通じて、一人前の英国紳士や淑女へと成長していったのです。

大正時代から昭和初期にかけて、日本の皇族も相次いで海外視察の途に就き、異文化や世界情勢を直接見聞きすることに努めました。1922年から始まる朝香宮鳩彦王の渡欧も、本来はこうした流れに沿って設定されたものでした。ところが、鳩彦王が現地で自動車事故に遭ったことで事態は一転、日本に残っていた允子妃も急遽フランスに赴いて、夫妻での生活がスタートしました。当初の予定を大幅に上回り、約2年半に及んだ二人



図2

揃ってのパリ生活、それはまさに朝香宮夫妻にとってのグランドツアーそのものでした。

現在、夫妻の滞欧中の足跡について記された記録等は残されていませんが、当館で所蔵する『受領証綴』や関係者の手元に大切に保管されている遺品類の分析を通して、かなり詳細に旅程を把握することができます。イギリス、ドイツ、オーストリア、ベルギー、オランダ、スイス、イタリア、スペイン……。朝香宮夫妻は何かと堅苦しい皇族の身分を伏せて、「朝伯(爵)」の肩書きでオリент急行や自動車に乗り、両大戦間のヨーロッパ諸国の独特な雰囲気を経験的に直接肌で感じ取ろうとしました(図1)。様々な土地を訪れた夫妻がこの時どのような感想を抱いたのかを知る由はありませんが、その経験は帰国後「アール・デコの館」となって具現化されることとなります。

二人は多忙な視察旅行の合間を縫って、時にはパリ市内の散策を楽しんでいました。滞欧中の思い出を綴った古いアルバムに、19区のビュッ

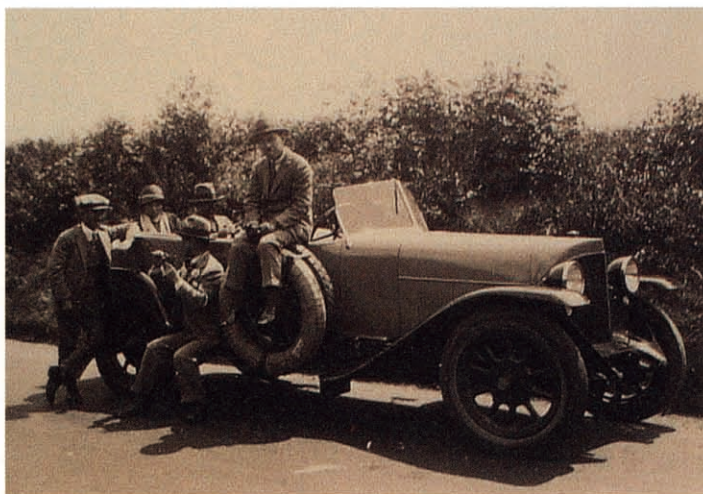


図1

ト・ショーモン公園を訪れた際の写真が残されています。フランス語で“禿げた丘”を意味する“ビュッ・ト・ショーモン”公園は、かつて石切場として使用され、その後荒廃していた敷地一帯を整備して、1867年パリ万国博覧会と同時にオープンした広大な公園です(図2)。園内には起伏に富んだ岩山を中心として、人工的に作られた滝や洞窟が各所に配され、今日でもパリ市民の憩いの場となっています。人気の撮影スポットである吊り橋上で撮った允子妃のポートレート(図3)。足下には帽子を被った鳩彦王の影法師が写っています。真剣な表情で「Souriez!(笑って!)」と呼びかける王の声が聞こえてきそうな、微笑ましい一枚です。

今回の「アール・デコの館 庭園美術館建物公開」展では、アール・デコ様式の宮邸が建てられる契機となった朝香宮夫妻のパリ滞在そのものに焦点をあて、夫妻が出会った風景や人々を初公開の資料とともにご紹介します。(牟田) ◆

図1.南仏方面への旅行の途中で随行の人々とともに、スペアタイヤ上に座って休憩する朝香宮鳩彦王と、後席中央に座る允子妃の姿が写っています。(個人蔵)

図2.パリ16区にあるビュッ・ト・ショーモン公園。夫妻が訪れてから90年近く経った現在でも、当時の姿をたいへんよく留めています。

図3.公園の吊り橋上で撮影された允子妃のポートレート。夫妻はともに写真撮影が趣味で、時には允子妃がカメラを構えて鳩彦王を撮影することもありました。(当館蔵)



図3